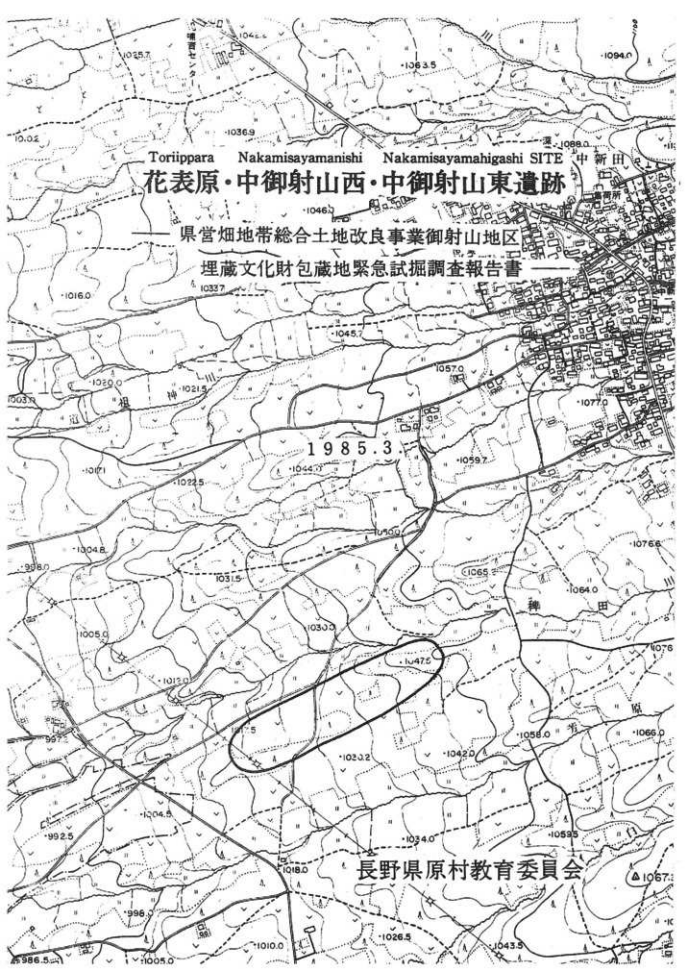


Toriipara Nakamisayamanishi Nakamisayahigashi SITE 中新田  
花表原・中御射山西・中御射山東遺跡

県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区  
埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書

1985.3

長野県原村教育委員会



## 序

原村には現在、80 を越える遺跡が全村にわたって分布しております。遺跡には大小はありますが、それぞれ旧石器時代から縄文時代そして平安時代を経て、中世におたる時期のいずれかに属し、地下に埋蔵されております。遺跡の確認は主に表面の遺物分布によって行われますので、これから新たに見つかる可能性もあるわけですが、本報告書の3遺跡は県営畑帯総合土地改良事業御射山地区に先立って昭和59年10月に原村教育委員会が行なった分布調査によって新たに発見された遺跡であります。工事の予定が12月に迫っていたこともあって、原村教育委員会では南信土地改良事務所の委託を受け、事前の緊急試掘調査を実施することができました。

この間、南信土地改良事務所の御配慮をはじめとして長野県教育委員会の御指導、そして地元の土地改良事業実行委員会の方々、地主の方の御協力をいただき、このような成果をあげられたことは感謝にたえません。また調査報告書の刊行に至る過程においてお世話をいただいた関係者の各位に対し、心から謝意を表する次第であります。

昭和60年3月20日

原村教育委員会

教育長 鎌倉 徳之助

## 例言

1. 本書は、「県営畑帯総合土地改良事業御射山地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村中新田字花表原・中御射山西・中御射山東にそれぞれ所在する花表原・中御射山西・中御射山東遺跡の緊急試掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、南信土地改良事務所の委託をうけた原村教育委員会が、昭和59年10月31日から11月7日にかけて実施した。整理作業は、11月8日から昭和60年2月28日まで行なった。
3. 本書の執筆および編集は平出一治・五味一郎が共同して行ない、図面の作図とトレースは平出・五味、拓本は平林とし美、写真撮影は五味が行なった。
4. 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会が保管している。

なお、本調査関係の資料には、花表原遺跡は83、中御射山西遺跡は84、中御射山東遺跡は79の原村遺跡番号で表記した。

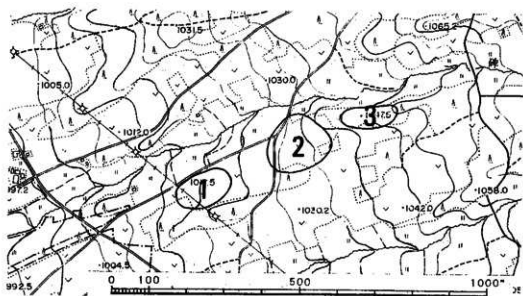
## 1. 発掘調査に至る経過

昭和59年度から実施される「県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区」に先立ち、原村教育委員会では、昭和59年10月5日から13日にかけて事業用地内の分布調査を実施し、周知の遺跡である梨の木沢遺跡（原村遺跡番号65）と御射山遺跡（同76）を含めた20地点で土器破片と石器を採集した。

その結果は、10月17日に行なわれた長野県教育委員会の「昭和60年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」において協議された。出席者は長野県教育委員会文化課・南信土地改良事務所・原村役場農林課・原村教育委員会の4者であった。

土地改良事業は今後数年におよぶことになるが、昭和59年度に工事が予定されている地域内の5地点で遺物を採集している。そこで現地踏査を行ない、地形からみて花表原、中御射山西、中御射山東の3遺跡を推定した。しかし、保護協議を進めていく上には、遺跡の性格とその範囲を早急に把握する必要があるし、また、緊急性もともなうことであり、村教育委員会で早急に試掘調査を実施し、その成果を踏まえた保護協議を再度行なうことになった。

その後、地元に対する説明と協議を行ない、原村教育委員会は、南信土地改良事務所から試掘調査の委託をうけて、昭和59年10月31日から11月7日にわたり、3遺跡の緊急試掘調査を実施することができた。



第1図 位置図 (1:10000) 1.花表原 2.中御射山西 3.中御射山東

## 2. 遺跡の立地

花表原、中御射山西、中御射山東の3遺跡とも、中新田区の西方で富士見町との境界付近に位置する。県道弘沢～富士見線から花表原遺跡が東方へ200m、中御射山西遺跡が500m、中御射山東遺跡が800m位入っているが、それは径約600mの範囲にまともり極めて隣接している。東方約700mには梨の木沢遺跡が、西方約500mには御射山遺跡が所在する。また、西方約1000mには諏訪神社上社の摂社である御射山社が鎮座している。地理的には、宮川の支流として八ヶ岳の山麓を流下する稗田川と芳原川に挟まれた地域にある。

花表原遺跡(第1図1)は、北側を流れる稗田川と南の東西に細長いやせ尾根の間のなだらかな斜面に位置する。標高は1020m、地目は普通畑である。

中御射山西遺跡(第1図2)は、花表原遺跡の東に隣接し、同じような立地であるが、中御射山東遺跡のあるやせ尾根が北東部に張り出してきている。標高は1030mでやはり普通畑である。

中御射山東遺跡(第1図3)は、稗田川沿いに細長く続くやせた独立尾根の南向き斜面に立地する。標高は1045m、地目は山林である。

3遺跡とも標高が1000m以上を計り、原村における遺跡の中では高所に位置しているが、中御射山東遺跡は、南向きの日溜りで、当地方における縄文時代後期初頭の遺跡立地としてもおかしくない地形といえるが、花表原遺跡と中御射山西遺跡は、南側に小高い尾根があるというやや特異な立地といえる。また付近には湧水等の水はみられない。

## 3. 試掘グリッドの設定と調査方法

本調査は、遺跡の所在確認を主目的とした緊急試掘調査であるため、3遺跡ともに遺跡と推定される地区に2×2mの試掘グリッドを設定した。花表原遺跡と中御射山西遺跡では、土地改良事業の地区割りとグリッド方向を一致させた。中御射山東遺跡は尾根のかなり急な斜面となるため、地形にならったグリッド設定をした。

グリッド設定は、いずれの遺跡も東西方向は50mの大地区を設定し、東からA区・B区・C区というようにアルファベットを用いた地区割りをした。大地区の中をさらに2×2mの小地区に分割し、この規準方眼となる小地区(グリッド)の東西方向も東からA～Yのアルファベットを用いた。南北方向は算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを51とし、そのラインを規準に南方は50・49・48というように南に行くにしたがい小さくなるように、北方は52・53・54と大きくなるように用いている。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば、花表原遺跡（第2図）左上の2×2mの調査グリッドをみると、大地区はF区であり、小地区の東西方向はEラインにあたり、南北方向が59ラインで、それは「E-59」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「FE-59」となる。

試掘調査は、地形からみて遺跡の中心と考えられる箇所を中心に、2グリッド（2×4m）を1単位とするグリッド発掘を実施したが、遺跡によってその数には違いがある。また、遺物の出土状態等によって1グリッド（2×2m）のグリッド発掘もところみだが、作物や立木の状態によってかならずしも整然としているわけではない。なお、掘下げは原則としてソフトローム層まで行なった。

結果的には、花表原遺跡でD区・E区・F区を、中御射山西遺跡でU区・V区・W区・X区を、中御射山東遺跡ではT区・U区・V区でグリッド発掘をしている（第2・4・6図）。

#### 4. 発掘調査の経過

昭和59年10月31日 テントの設営。花表原遺跡のグリッド設定。

11月1日 花表原遺跡のグリッド発掘。EU-65グリッドを中心にして縄文時代後期の無文鉢が出土。また、EU-30グリッドから大形の打製石斧が出土。この他に縄文後期土器片と石鉄等が出土。

11月2日 花表原遺跡のグリッド発掘。中御射山西遺跡のグリッド設定と発掘。土器片と玉髓のフレイク各1点出土。

11月3日 中御射山西遺跡のグリッド発掘。黒曜石のフレイク1点出土。中御射山東遺跡のグリッド設定。

11月4日 中御射山東遺跡のグリッド発掘。土器片1点出土。午前中のみ作業。

11月5日 中御射山東遺跡のグリッド発掘。遺物の出土なし。

11月6日 花表原・中御射山西遺跡のグリッド発掘。両遺跡で縄文後期の土器破片が各1点出土。中御射山西遺跡で一部埋めもどし作業。

11月7日 花表原遺跡のグリッド発掘と一部埋めもどし作業。グリッドのクイ抜き、テントの撤収等のかたづけ。

## 5. 花表原遺跡

### (1) 発掘の状況と土層

花表原遺跡は 61 グリッドで 236.4 m<sup>2</sup> の試掘調査をしている (第 2 図)。

EU-65 グリッドとその付近から縄文後期の完形鉢が出土したこともあり、8 グリッド (8 × 4 m) の範囲を調査したが、遺構を検出するまでにはいたらなかったし、その性格を把握することもできなかった。

グリッド配置図の斜面は礫が多量に出土したことを示すが、礫は自然流出のものである。

本遺跡の基本層序は次のとおりである。

第 I 層 黒褐色土層。畑の耕作土層。(厚さ約 15 cm)

第 II 層 黒色土層。第 I 層よりしまっている。小指大から大きいものでは径 40 cm 位までの垂円礫や円礫を含むグリッドもある。(厚さ 12~50 cm)

第 III 層 茶褐色土層。この土層の認められないグリッドもある。第 II 層と同様の礫を含むグリッドもある。(厚さ 15~20 cm)

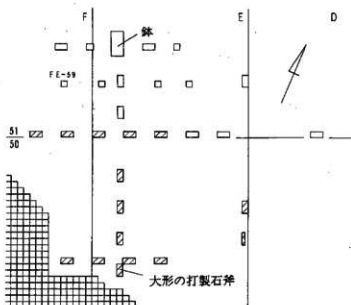
第 IV 層 漸移層。ローム層からの漸移層。汚れローム層。第 II 層と同様の礫を含むグリッドもある。(厚さ 10~15 cm)

第 V 層 ソフトローム層。大人の握り拳大より小さい礫を含むグリッドもある。

### (2) 遺物

本遺跡で発見された遺物は土器と石器がある。土器は完形 1 点と破片 4 点、石器は打製石斧 2 点・石鏃 1 点と黒曜石のフレイク 1 点である。

出土遺物に若干の説明を加えると、第 3 図 1 は完形土器で、底部の径は 12.4 cm、口径は 30.1 cm、高さは低いところで 18.7 cm、高いところで 19.2 cm とやや傾いている。形態は底部から口縁部にかけて朝顔状に開いているが、中期の

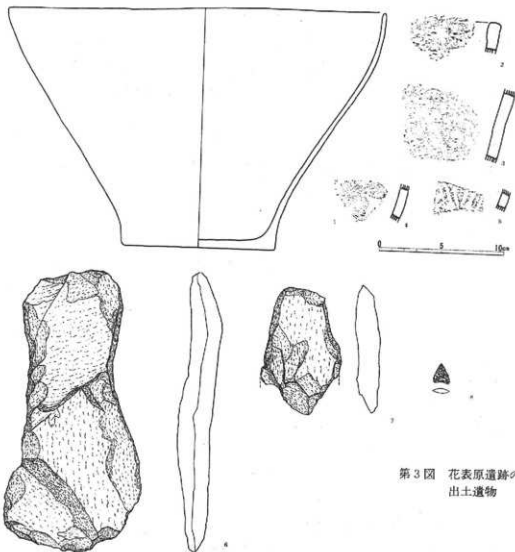


第 2 図 花表原遺跡の試掘グリッド配置図

浅鉢に比べると深いものであり、ここでは鉢と呼んでおきたい。底部の多くは欠損するがアジロ底である。胎土には細かい川砂を混入し、整形および焼成は普通であるが、器壁は薄い。色調は灰黒色のところもみられるが明るい褐色をしている。器内面の上部には極めてわずかではあるが、炭化物の付着がみられる。無文土器で、明確な帰属時期を示すことはできないが、縄文後期初頭と考えてさしつかえなかろう。I層とII層からの出土である。

2は無文の口縁部破片、3は胴部破片、4は細かい縄文が施された破片、5は沈線と縄文が施された後期初頭の堀ノ内式土器である。4点とも深鉢の破片で、胎土・焼成とも普通である。2・3・5がI層、4はII層出土である。

石器は、6と7が硬砂岩製の打製石斧で、5は長さ22.3cm、最大幅10.7cmという非常に大きな優品で、その大きさが注意されよう。縄文後期の所産と思われる。7は欠損品である。8はチャート製の小形無茎石鏃である。全てII層出土。



第3図 花表原遺跡の  
出土遺物

### (3) まとめ

本遺跡は、耕作による攪乱を受けていない第Ⅱ層からほぼ一個体分の土器と打製石斧・石鏃などが発見されたこと、しかし遺構等は検出できず、遺物の出土も散発的であることなどから、第Ⅱ層中に生活面をもつ縄文時代後期の単純な包蔵地であると判断される。これらの遺物を残した人たちの居住区（集落跡）はどこか別に存在するものと思われる。だが、単独で完形鉢や大型の完形打製石斧が出土するという状態は、その性格をめぐり今後類例の増加を待って検討する必要がある。

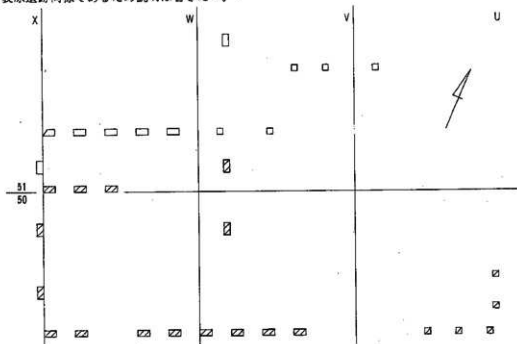
## 6. 中御射山西遺跡

### (1) 発掘の状況と土層

中御射山西遺跡は54グリッドで214.4㎡の試掘調査をしている（第4図）。

出土遺物は少なく遺構を検出するまでにはいたっていない。やはり花表原遺跡同様に礫が出土したグリッドもみられた。礫が多量に出土したグリッドはグリッド配置図に斜線で表示してあるが、花表原遺跡と同じで南側の尾根添いに下方に連続して続く傾向がみられること、また、現在でも大雨の時などには水の流れ道となるという地主の話などから、自然流出によるものと考えられる。

基本層序は、上層から黒褐色土層・黒色土層・茶褐色土層・漸移層・ソフトローム層で、花表原遺跡同様であるため説明は省きたい。



第4図 中御射山西遺跡の試掘グリッド配置図



## (2) 遺物

本遺跡で発見された遺物は土器と石器がある。土器は破片4点、石器は図示していないが、黒曜石のフレイク1点と、ピエス=エスキュー状の稜線のつぶれと剝離がみられる玉髓1点である。

第5図1は沈線が、2には縄文が施され、3、4は無文の縄文土器破片である。4点とも深鉢の破片で、胎土・焼成とも普通である。1～3は第I層出土で4は表採資料である。



第5図 中御射山西遺跡の出土遺物

なお、図示していないが、工事予定地外で平安時代の土師器の小破片2点を採集している。

## (3) まとめ

本遺跡からは5点の資料が出土しているが、いずれも第I層からの発見であり、後世の耕作や土の移動等による何らかの原因によって動かされたものであろう。遺構は検出されていないことから、当時の人々の生活の舞台であったことは間違いないものの、極めて稀薄な散布地と思われる。

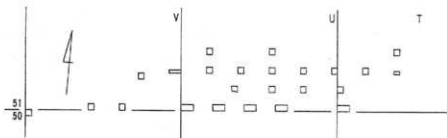
## 7. 中御射山東遺跡

### (1) 発掘の状況と土層

中御射山東遺跡は30グリッドで、113.2㎡の試掘調査をしている(第6図)。

出土遺物は土器破片1点だけで、遺構を検出するまでには至っていない。

本遺跡の基本層序は次のとおりである。



第6図 中御射山東遺跡の試掘グリッド配置図

第I層 褐色土層。山林の枯葉、表土層。(厚さ約30cm)

第II層 茶褐色土層。粘性もしまりもない軟かい地層。(厚さ約60cm) この層は51ライン

では黒色土層（花表原遺跡第Ⅱ層と同じ。ただし礫は含まない。）となる。（厚さ約40 cm）

第Ⅲ層 漸移層。ソフトローム層からの漸移層。（厚さ10～15 cm）

第Ⅳ層 ソフトローム層

## (2) 遺物

本調査で発見した遺物は土器片が1点で、胎土には長石・石英・金雲母を混入した焼成の良い縄文土器である（第7図）。第Ⅰ層出土。



第7図 中御射山  
東遺跡の出土遺物

## (3) まとめ

この遺跡は日当たりの良い南斜面にあるため、遺構の存在も予想されたが、結果的には第Ⅰ層から1点の土器片が発見されたに止まった。土層中に炭化物や焼土粒もまったく認められなかったことから、きわめて希薄な散布地と捉えておきたい。

## 8. 本調査のまとめ

事前に実施した分布調査によって、縄文時代の横刃形土器1点を採集した地区を花表原遺跡、打製石斧1点と無文土器2点を採集した地区を中御射山西遺跡、縄文時代後期と思われる大きな土器片2点を採集した地区を中御射山東と把握して、実施した試掘調査であったが、その結果は遺構の検出には至らず、遺物を発見したに止まった。

花表原遺跡からはプライマリーな状態で完形鉢や打製石斧を発見し、縄文時代後期の人たちの行動の一端をうかがう貴重な資料となったが、中御射山西と中御射山東遺跡からは、定着した遺物は発見されず、後世に移動を受けた第Ⅰ層からわずかな資料が発見されただけであった。やはり、付近に生活に必要な水がないことと、花表原遺跡と中御射山西遺跡については北向き斜面であること等、当時の人々が居を構えて生活するには制約が大きかったようである。

なお、遺跡の保護措置については、県教育委員会と協議を行ない、3遺跡とも全城にわたって試掘坑を設けたにもかかわらず遺構の発見はなく、遺物も少なかったこと、完形鉢の出土した花表原遺跡についても、出土地点を拡張したが新たな成果がなかったこと等から、事前調査を実施するには及ばないと判断された。ただし、地形的に恵まれていないと思われる花表原遺跡の例は、今後、遺跡立地を考える際に注意が必要であることを示唆しているものと受け止めていかなければならないであろう。

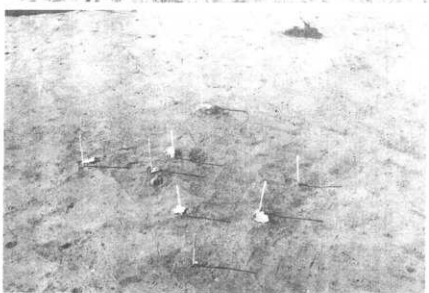
1. 花表原遺跡



2. 花表原遺跡 ET・  
S-31 グリッド自然  
曝出土状態



3. 花表原遺跡  
一括土器出土状態





4. 花表原遺跡出土鉢  
(接合前の展開)



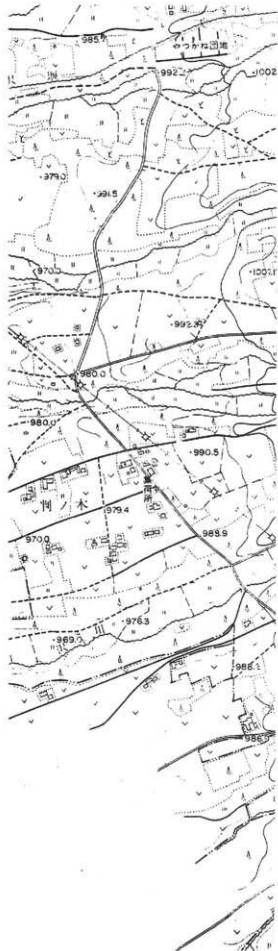
5. 中御射山西遺跡



6. 中御射山東遺跡

### 発掘調査団名簿

団 長 鎌倉徳之丞（原村教育委員会教育長）  
調査担当者 五味一郎（原村教育委員会事務局）  
調 査 員 樋口誠司（富士見町井戸尻考古館）  
事 務 局 原村教育委員会事務局——行田竹輝（教育次長） 武田伊都子（主任） 平出一治 佐貫正憲  
調査参加者 中村すずみ 中村よしの 五味としゑ 小林よね子 真道ふき 宗川英明 宗川きくみ 菊池卓子 芳沢とも子 清水菊一 清水清江 五味芳 中村ふさゑ 藤森米子 宮坂とし子 藤原智恵子 小林静子 平林とし美 （順不同）



原村の文化財 2

花表原・中御射山西・中御射山東遺跡

—— 県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区  
埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書 ——

発行日 昭和60年 3月20日

発行 原村教育委員会  
長野県諏訪郡原村